

富士に祈る 78

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 ― 火祭り・その3 ―

先回まで、「山仕舞い」を迎えた富士山麓の行事の中でも通称「吉田の火祭り」と呼ばれる行事を取り上げて記した。今回は各地に残されている「火祭り」を取り上げ、その諸相を記しておく。

東京都清瀬市中里には丸嘉講と呼ばれる富士講があり、「火の花祭り」と呼ばれる火祭りが行われている。行事は毎年九月一日の午後六時から行われる。先立つ準備として午前九時ごろから当地に築かれている富士塚の登山道に「二〇八灯」と呼ばれる長さ一メートルあまりの竹串に付けられた口ウソクが立てられる。また、富士塚頂上の浅間神社小祠の背後に富士講の御



点火される大松明(東京都清瀬市中里)

神体として「御身拔」が掛けられ、「大幣束」が置かれる。そして、富士塚の麓には、「大松明」(注:通称「トウミヨウ」とも)と呼ばれる高さ五メートルほどの麦わらを円錐形に積んだものが据えられる。ちなみに、大幣束は行事当日に「二〇八灯」の口ウソクを立てる竹串と共に作られる。大幣束は毎年新調され、先達がこれを床の間等に保管するので、残された大幣束の本数で先達を何年務めたかわかるという(注:丸嘉講の場合、先達は世話人の中から推薦を受けて就任する。任期は特に設けられていない)。また、「大松明」に使用する麦わらは四、五十年前までは各

家から一束ずつ持ち寄っていたというが、平成二十八年現在は百坪程度の耕地で富士講共同の麦を作っており、これを使っている。

午後六時になると富士塚の頂上で「御伝え」をあげる。丸嘉講にも以前は「御伝えの節」が残っていたというが、先々代の先達が亡くなる頃には途絶えてしまった。富士講の役員は富士塚に登ってお参りをする人々をもてなし、

お清めの酒をふるまう。

午後九時になると「二〇八灯」の口ウソクに火がともされ、講員は「南無仙元大菩薩」と唱えながら提灯をもった月番(注:近在に鎮座する氷川神社の月番で、八月と九月の月番が当該行事にも携わる)を先頭に富士塚を降りる。「大松明」を左回りに三回まわったところで「同「拝礼」をし、先達が大幣束で「大松明」を祓う。続いて、講員の一人が「大松明」の四方で大きく腕を回す所作を行う。これは「四方固め」と呼ばれる所作である。四方固めが終わると、月番の提灯から火をとって、「大松明」に点火する。この間、富士講の人々は鈴を鳴らして「御神語」を唱えている。

達が火を祓い、参拝の人々を次々と祓っていく。これは、参列者のためのお祓いで、講員の「古い人」から順に入れ代わりながら「大松明」が燃え崩れるまで行われる。「大松明」が燃え崩れると、参拝の人々は手にしたバケツ等に燃え殻を入れ、自宅に持ち帰る。この燃え殻を玄間や台所に置いておくと、家内安全、五穀豊穡が叶うとも言われる。また、富士塚に立てられていた「二〇八灯」の燃え残りも参拝者が持ち帰る。この燃え残りの口ウソクは、陣痛が始まった時に火を灯すとお産が軽くて済むと信じられている。

「大松明」が燃え尽きるのを待って、講員は再び富士塚へ上がり、片付けに取りかかる。十時ごろには片づけを終え、一同下山し、先達の家に向かい、「直会」が行われる。直会は「オシノギ」「本膳」と続くが、「本膳」にはうどんを食べるのが当地の

習わしである。十一時過ぎには「庭場」を片付けてください」という先達の言葉を合図に「お開き」となる。

中里の場合、集落全体が富士講に入っており、平成二十八年現在も三十八軒が講に所属している。火の花祭りを取り仕切るのは、このうちの二十人前後の役員であるが、講員の基盤が強固であることが「火の花祭り」のみならず、北口本宮富士浅間神社への「初詣り」(一月上旬)や「富士塚の山開き」(六月一日)、「登拝」(七月下旬)、「火の花祭り」(九月一日)、「星祭り」(十二月冬至)といった年間行事の継続につながっている。

いま一つの事例として横須賀・丸伊講で行っていた、「三浦富士」と通称される七月八日のお焚き上げ行事を取り上げよう。丸伊講の年間行事は正月、五月、九月のそれぞれ八日に行われる「月拝み」と七月八日に行わ

れる「三浦富士」であった。月拝みは「講屋」と呼ばれる「御身拔」を預かる家に講員が集まって「拝み」をした。そして、五月の月拝みに七月に行われる登拝の期日を決めたという。

「三浦富士」は丸伊講の外に、周辺の高尾山三折禰講や元二講といった富士講が合同して行われる行事であった。当日は早朝から三浦富士に登り、火壇に向かつてお焚き上げをする。祈願の内容はさまざまだが、海に近いという場所柄、大漁祈願等は多かったという。「大先達」と呼ばれる人が何人もいた盛時にはお焚き上げを行う順番が回ってこないほどであったというが、独り先達(注:講員がいなくなり、先達一人になってしまふこと)となった丸伊講・齊藤義次先達の高齢を理由に平成二十六年を最後に行われなくなった。「火祭り」の諸相として中里の「火の花祭り」と横須賀の「三浦富士」の行事を例にあげた。「火」を扱

う富士講の行事は富士山の火山活動の具現化、その鎮火への願い、火による浄化等、目的に合わせて様々に行われ、さらには、御祭神の火中出生譚といった神話に依拠しながら説明される。これは、富士山という御神体をめぐる「信仰の手段」であり、「信仰の再現」でもある。行事の継続にはそれを支える人の力が不可欠である。また、行事を支える人々を動かすのが「信仰」と言う目に見えない力なのであろう。神と人の紐帯は目に見えない力によって保たれている。これを断絶するのは人の都合である。しかし、人の都合によって断絶したものを再現することは不可能だ。時代を経ることで形態は変化する。その変化を享受しつつも「信仰の動態」として行事が継承されることが「信仰」を遺すことになるのではないかと考える。

付記・富士信仰行事の記

本稿をもちまして、平成二十二年六月号より連載されておりました、城崎陽子先生による「富士に祈る」が最終回を迎えることとなりました。城崎先生におかれましては七年前に渡り、富士信仰や、そこから派生した教団の歴史について書いていただきました。次号からはテーマを新たに、「日本の古典」について、特に万葉集の世界を中心に新連載が始まる予定になりますので、御期待下さい。